ZOOM

たった一枚の地層を探して

佐藤 峰南（平成18年卒）

秋田高校を卒業後、天文学を学ぶために鹿児島大学へ進学。そこで「地層中から宇宙塵を取り出す」という研究を知り、地層を通して宇宙を読み解くという発想に衝撃を受けて地質学の道に進みました。約二億年前の天体衝突の証拠を岐阜県坂祝町の地層中から発見して以来、巨大な天体衝突と、それに伴う生物絶滅・環境変動を読み解く研究を続けています。

研究では、クレーターが報告されている時代の地層が露出する国内外の場所に出かけ、何mも続く地層から、天体衝突によってできた「たった一枚の地層」を探します。ロマンがある一方、何も見つからず、悩む時期もありました。

転機となったのは、6600万年前の巨大天体衝突クレーターを掘削する国際プロジェクトへの参加です。異分野の研究者との議論を通じ、「天体衝突」が生命の進化へと繋がる大きな研究分野であることを知りました。近年は、衝突によって生じた海底下の熱水が、絶滅後の生物活動に関わった可能性も見えてきています。

博士号取得後は任期付きの職を転々とし、コロナ禍には国内で職を見つけられず、一年半をイタリアで過ごしました。それでも、受け入れてくださった先生に励まされ、ここまで続けてこられたと思います。

研究で行き詰まった時、私を前に進めてくれたのは、人との出会いと視野を広げることでした。秋田には豊かな自然や鉱山など、地球科学の教材となるものがたくさんあります。これからも学生たちと研究を続けながら、地学の魅力や、地球と宇宙を繋ぐロマンを少しでも多くの人に伝えていきたいと思います。



さとう・ほなみ／九州大学理学研究院地球惑星科学部門助教。鹿児島大学修士課程修了後、九州大学博士後期課程へ進学し、博士（理学）取得。2022年4月より現職。岐阜県での調査で巨大隕石衝突の証拠を世界で初めて発見し、2015年3月、日本学術振興会育志賞受賞。質量分析による天体衝突の地球化学的証拠の検出法を確立し、「どんな天体衝突の研究もできるラボ」を目指して研究中。

「南極で仕事」、気づけばそこには…

大久保 瑠衣（平成14年卒）

「南極で仕事をしたって言えるの、かっこいいかも」。日本の南極観測隊同行取材に秋田魁新報社が手を挙げ、社内で記者を募ったとき最初にそう思った。ただ動機としてはミーハーで薄い。記者経験は浅く、末端冷え性。そんな私に南極行きを勧めてくれたのが、第51次隊に同行した先輩記者の安藤伸一さん（昭和63年卒）。カメラ記者の私に「南極の今を記録として残すのは会社の財産。しっかり撮ることが大切」と言葉をくれた。

昭和基地に到着すると、思いがけず「秋高」が目に飛び込んだ。前年度から滞在する越冬隊に「秋田高校陸上部」と書かれたジャージ姿の隊員がいたのだ。気象庁から参加の齋藤樹隊員（平成25年卒）だ。日本から約1万4千キロ離れ、どこの国にも属さない特別な場所で、母校「秋高」を背負って活動する姿を見て、誇らしさが込み上げた。

4カ月間、南極での集団生活。逃げも隠れもできない状況を楽しめたのは、高校時代の硬式野球部マネジャー経験があってこそ。試合や合宿を通して先生方や保護者と深く関わった時間が、多様な世代と協働する今の土台にある。

観測船「しらせ」や昭和基地の宿舎で二段ベッドに寝泊まりする生活も、合宿での天上館のマネ部屋や研修会館と似たようなものだった。

食事、生活、景色…。未知の世界のリアルな記録は、さきがけ電子版「南極ログ」で発信しており、地図から記事をたどれます。写真展等（各地で開催中）、南極関連のオファーもお待ちしています。

南極log



おおくぼ・るい/秋田魁新報社統合編集本部報道センター・写真映像グループ長。弘前大学人文学部卒。06年秋田魁新報社入社。営業部などを経て18年デジタル部配属、カメラ記者に。同年の甲子園で準優勝の金足農業高を1回戦から決勝まで現地で撮影。第66次南極観測隊同行取材（24年12月～25年4月）。秋高野球部を甲子園で撮影できる日を心待ちにしている。

国内外、各分野で活躍する同窓生の情報をお寄せください ➡ E-mail:aki-doso@cna.ne.jp